多面体としての山岡先生

泉　利明

１１月頃だったか、詩人の荒川洋治がＮＨＫ教育テレビの番組で、「文学談義」を復活させようと話しているのを見た。いかにも彼らしいアナクロな主張だが、私が山岡先生と時間を共有するなかで、多くは酒を前にして行ってきたのも、言葉の最も平凡な意味での文学談義であり、映画談義、人物談義、芸能談義、食べ物談義等々であったような気がする。もちろん彼我の知識量の差はいかんともしがたく、こちらはだいたい聞き役にまわっていて、談義というのもおこがましいが、山岡先生の凄いところは、取り上げる対象に枠がまったくなく、どんな話題を持ち出してもきちんと返されることであった。知り合って間もない頃、当時まだ存在していた日活ロマンポルノの監督小沼勝への偏愛をおずおずと口にしたら、即座に同意してもらい、心強く感じたのを思い出す。もっとも、好きな歌手は大月みやこだといった時は、鼻で笑われただけだったが。

山岡先生とは、多面体である。サイコロを振って一の目が出た時には、六の目が視界から隠されてしまうのと同じように、人は先生と付き合いながら、そのいくつかの面に接してはいても、全体像を把握した者は一人もいないにちがいない。このような多面性は、先生の興味の方向が具体的に示されている論文にも、はっきり現れている。ここ十年ほどに書かれた文章のタイトルを見ても、デュラス、ゲンスブール、ジュネといった人名だけでなく、はやり歌、風景画、美食、ファッションと、主題もさまざまで、人によってはあまりに無節操だと非難するかもしれない。一つの論文中でも同じことで、たとえば「アルコール、ドラッグ…そして表現」に出てくる固有名詞は、ほとんど支離滅裂というか、百花繚乱というか、ボードレール、ミショー、コクトーの傍らに、フロイトはともかく、ブリヤ＝サヴァラン、バロウズ、コールリッジ、デスノス、そして『星の王子さま』のサン＝テグジュペリまでもが登場する。

そこには、現在のフランス文学研究をつまらないものにしている、「フランスの大学」での方法論に対する盲従など微塵もないし、独りよがりの理論をもてあそぶ抽象的難解さもない。われわれが読むのは、山岡先生独自の感受性で探知された、さまざまな人物や主題のあいだに存在する見えない関係性であり、その関係性が作りあげる新しいパースペクティヴである。

こうした多種多様な主題の混在を可能にしている、山岡的批評の秘密はどこにあるのだろうか。この機会を利用していくつか論文を読み返していると、「皮膚感覚」という言葉に目がとまった。本人は否定するかもしれないが、これは大きなキーワードだと思う。山岡先生がこだわったのは、実存としての作家ではないし、ロラン・バルトのいう「作者の死」

の後に残された、テキストの自律性でもない。そうした「あれか、これか」の二者択一ではなく、先生は作家という深層と、言語表現という表層を、一度に結びつけるものとしての皮膚感覚を鋭敏に察知する。作家の「生理」という言葉も、よく口にされていたが、「皮膚感覚」の方が、相反するものの同時的併存をよりよく表しているだろう。同性愛や、アルコール、ドラッグ、美食は、いってみれば作家にとっての皮膚的な体験でもあるが、そういった経験から生まれる皮膚感覚が、作家を特徴づけ、作品に独特の陰影を与える。先生は、そのあり方を、共感をもって解き明かす。しかも、具体的であると同時に抽象的な皮膚感覚は、その共通性や類似性によって、思いがけない人間や主題どうしを結びつける。このような探求が、山岡論文の作り出す独特の世界の源にあるのではないだろうか。

山岡先生は昨年、失明の危機に見舞われた。先生は、「聴く人」であり、「話す人」でもあるが、その本領は、やはり「見る人」「読む人」であり、その意味で、病気による心痛はいっそう強かっただろうと想像される。しかし、手術もうまくいったようで、今後は、前よりずっと性能が向上したという眼で、さまざまな人間や文学・芸術作品を見て、われわれには読み取ることが不可能な、物事のあいだの隠されたつながりを教示していただきたいと、強く願っている。